せたがや町総連だより

第17号
発　行　世田谷区町会総連合会
世田谷区若林4-31-9
ポライト第2ビル2F
☎・FAX 5481-3456
発行人　会長　安田憲吾
編　集　情報誌編集委員会
編集委員長　渡辺三郎

乱れた世相を糺(ただ)すために　座談会

――町会長の絶え間ない苦労を皆で理解しよう――

平成14年10月22日

於：第1庁舎5階151会議室

最近の世相

安田（町会総連合会会長）
情報編集委員の皆さま、いつもお骨折りいただいて感謝しております。今日は十七号の編集ですが、編集委員の皆さまのご協力がなくてはできない仕事ですのでこれからもよろしくお願いいたします。

渡辺（編集委員長）
先日この十七号の編集会議で、何を議題に取り上げようかという話になったときに、神宮委員から最近の世相についてひとくだり話しがあって、「こんなことで日本はどうするのか」ということになった。そのとき同席されておおいに同意をされていた清水さん、玉井さんに少し近頃の世相、これでいいのかという状況をお話いただきたいと思います。

清水（太子堂一丁目町会会長）
小学校の校長を十一年間勤めました。世相をみておりましてまことに慙愧に耐えない、まさかということがたくさん起きております。話したいことは山ほどありますが、何をおいても学校

清水　太子堂一丁目町会会長

◎出席者◎

―区側―
- 生活文化部　参事　田中　茂
- 生活文化部　子ども・男女共同参画課長　水戸都紀子

―町総連側―
- 町会総連合会　会長　安田憲吾
- 編集委員長（町会総連合会副会長）　渡辺三郎
- 太子堂一丁目町会会長（世田谷地域）　清水庄太郎
- 北沢二丁目協和会会長（北沢地域）　松原佳子
- 上用賀町会会長（玉川地域）　飯田恭次
- 祖師谷千歳台自治会会長（砧地域）　神宮寿夫
- 給田西住宅自治会会長（烏山地域）　玉井良助

の先生がまわりの助けを借りないで、先生自身がきちっと自分の務めを、命をかけてとは申しませんが、きちっとやって欲しい。そして将来ある子どもたちを「おまえ、しっかりやれよ」と励ましてやることで子どもたちの信頼を得ていただきたい。家庭教育も重要なポイントですが、学校の先生が父兄の皆さんから信頼を受けるように熱心でいい先生であって欲しい。そんなことを今つくづく思っております。日本はもっと昔のいいところをとり戻したいという気持ちでいっぱいです。

玉井（給田西住宅自治会会長）

　現在の町会、自治会のおかれている環境というのは複雑怪奇です。なぜかというと町会長、幹部の方は各地域のあらゆる機関の大きな役割を演じておられる。大きな問題では警察関係、消防を中心とする防火関係、学校協議会委員、身近な問題では青少年地区委員、身近なまちづくり推進委員、ごみ減量・リサイクル推進委員会。それを地域の住民を捲き込んでやっているかというとそうでもない。自分がやらなくちゃあということで非常に無理をしてやっている。そこにずれがある。みんなでやるということにはなかなか到達しにくい。どういうふうに町会を運営するかという問題については町総連においても取り上げきれない。各地域のご熱心な方に腹蔵のないご意見を頂戴しようと思っております。

神宮（祖師谷千歳台自治会会長）

　これは世田谷だけではなく全国的な問題だと思うんですね。世の中はずい分変わりまして少子高齢化社会ですか。昭和二十年ごろはアメリカの放出物資、とうもろこしなどに眼を引かれました。ところが本当の敗戦は五十年くらいたってから分かるといわれていたのですが、それが最近出てきた。それは何かというと価値観の大きな変化でしょうか。一億一千万の国民を世代別に見ましても、一家の中では夫婦で親子で、また教師と生徒の間、役所のシステムにおいても管理職と中間職と全部に価値観の相違がでています。これは日本ばかりではなく世界的ですね。思想の変革、そういうことで果たしていったい日本はどうなるか。国からだされた施策というものを各地方自治体、世田谷区、そして最先端を預かっているのは私ども町会・自治会なのですが、なかなか昔の戦時中のように右向け右というようにはいかない。価値観の相違というのか目先のことを追っている。子育てがおわり時間があるからレジャーの小遣い稼ぎをしようという家庭の奥さん方がいる。子どもは学校に預ければ何とかしてくれるだろうと、親子の交流も全然ない。そんな中で育てられた五十歳の娘がいますが、ぜんぜん話が合わないですね。「お父さん古い」の一言です。私は問題となっている根っこは、全部公徳心の欠如によるものではないかと思うんですよ。奉仕、最近でいうとボランティアの最たるものは自治会、町会など地域のことです。定年退職をした人たちは自分の趣味を生かすだけの生活をして、住んでいる地域に目をむけない。目をむけないどころか協力しない。

神宮　祖師谷千歳台自治会会長

　今国会が始まっていますが。五十年の人生が今は百年になっていますが、この間、よりよき人生を送るには細かい施策も大事だけれど、指導者をはじめ一住民にいたるまで何かの方法を考えるのが前提ではないかと感じたわけです。これが全てだと思いますね。これがあれば不平不満もお互いに分かち合っていこうということになる。自分の心の羅針盤というものをもっていかなければ。

　私も戦前教育を受けた人間で孫もいますが、これから五十年先、日本がどうなっているのか見当がつきません。

渡辺　編集委員長

渡辺　編集会議のときに、新聞を賑わしているような子どもを目の高さから落として殺してしまうとか、一週間も食事を与えないで死なしてしまうとか、今の世相はどうなっているのだろうというのが話のきっかけだったのですが、今三人の

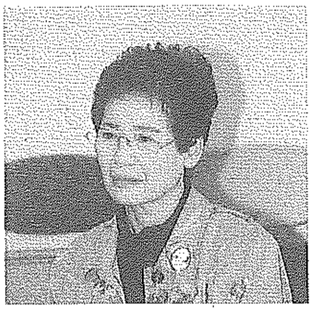
方からそのときにお話いただいたことを伺いました。そのときいらしていない飯田さん、松原さんから全般的なお話をお願いしたいと思います。

定住社会から変動と横割の世帯

飯田（上用賀町会会長）

私は町会活動に携わって十何年になっていますけれど、その間でもかなり地域社会は変化しております。少し長いスパンで考えてみると、定住社会から転勤社会に変わっていく過程を、それぞれがその中にいながらも気が付かないうちに地域社会が変わってきてしまった。かつては街に軸足をきちっと置いた人たちがそれぞれの町にいて、その人たちが自分達の街の歴史を維持し、次の世代に手渡していくということがあったわけですが、昭和三十年以降というのは人的な民族移動ではなく、企業なりにずーっと働いていく、その過程の中で転勤社会が形成されてきたのではないかと思います。

それから行政とかそれぞれの施策で縦割り社会といわれるのですが、今の日本人の考え方は三年ぐらいたつと、価値観というか生活の仕方も変わってきている。ために、世代ごとの交流と口では言いますが、実際には前後の世代がどういうことを考え、どういう行動をとっているか、もしかすると分からないという横割社会ができている。それではその中でどういうことが考えられるかというと、やはり自分たちの一番近くの生活圏で寄り合いの場所をつくっていく。行政は地区会館などを地域と協力してつくっていますが、もっと気楽に集まれる場所があったらいいなと思う。そこで手をつけられるのが学校。学校開放という言葉がでていますが、学校は開放するものではなくて、本当は地域と非常に密接しているというか同じようなものですね。学校の教室の一つくらいは地域が自由に使える寄り合いの場になって、時には防災の話ができ、あるいはお年寄りや子どもの話ができる。余り外から枠付けしない寄り合い場所が学校の一部にあってもいいのではないかということを考えております。



松原　北沢二丁目協和会会長

松原（北沢二丁目協和会会長）

ちょっと珍しいといわれますのは女性だけでやっている町会でございまして、男性は入っていらっしゃらないために逆にいいますとやりやすい。あうんの呼吸でできます。むかし子どもたちが同級生であったり、先輩後輩であったりします。

戦災で焼けませんでしたので古い町ですから、子どもたちが孫連れて帰ってくるとか、だんだん細分化されて庭がどんどん狭くなるという状態にはなっておりますけど、まだ地元の方がかなり残っていて、あの方はどこそこのお嬢さんで、こちらはどこそこのお嫁さんという具合にやりやすさは残っておりましたけれど、ご多聞にもれずマンション化があったり、場所が下北沢という繁華街に近い関係で古いお宅が建てかわると、上がお住まいになって下は商店という住宅と商店が渾然としている状態で、またそれが魅力的だといって訪れる方もたくさんいらっしゃいます。住んでいるものとしては迷惑なことが多々あるのですが、町としては栄えていく雰囲気になっていると思うのですね。

その中で町会というのが他の住宅と違って、商店街と一緒にやっていくというような形になって、音楽祭とか演劇祭とかにも参加しております。学校協議会などでもお話に出ますが、そういうイベントに小学生や中学生を参加させてもらう。防災訓練にも中学生に参加してもらう。若い人たちを参加させてもらうという方向で地域は動いております。それは徐々にですが密接な関係になっていくということと、今いろんなことで人と接しないでいられるみたいなところがありますけれど、やっぱり求めているのは人の温もりなのではないでしょうか。下北沢が何であんなに栄えるかというと肩と肩とが触れ合うほどの細い道をぞろぞろ親子で歩いていたり、手をつないで歩いている男女がいたり、ごちゃごちゃしているところだからではないでしょうか。高齢者も多い地域ですが、そんな地域の刺激を受けながら暮らしているということが良いのかもしれません。

問題もたくさんあります。放置自転車、オートバイ、それから落書き、ポイ捨てなどです。私たちはそれをほっておけないということで町をパトロールしたり、「落書き消し隊」というのをつくりまして実際に消したり塗りつぶしたりして、やっている姿を見ていただいて町の人にも訪れる人にも知ってもらう方法をとった活動をしております。

それから「身近なまちづくり」ではまちの要所要所に花を植えたりということもしております。ライブなどに集まる男女も、騒がしいし、ごみは捨てるしで文句をいわれることのほうが多いわけですね。それで音楽祭ではそういう人たちを巻き込んで一緒にライブをやりましょうと町全体のお祭りにひきこむ。北沢祭りでは幼稚園児たちから高齢者の方々の演芸や作品を展示したりすることによって、多くの人たちと町の人たちが知り合うという機会を持つように心がけて地域としては活動しております。

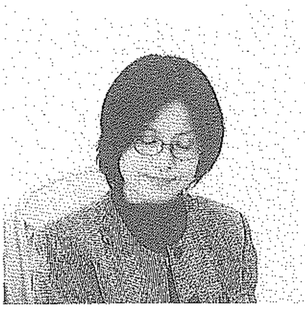
空き教室の積極的な利用を

学校協議会などでも話がでますが、近所に保育園などがありますから、子どもを連れて散歩をしている保母さんのお手伝いなどを、私たち世代の暇な人が自由にできると町としてもいいのではないかと思います。それからさっきお話がでたように子ども連れでもお年よりでも自由にいかれる場が欲しい。学校なら学校でいいのですが、お借りするのにいちいちけやきネットでとらなければならない、何しなければならないというのではとてもじゃありません。それがダメなときには何も出来ないということなんですよね。それで地域としていつでも集まれる場所ということをどれほどかお願いしたのですけれど、作ってはくださいましたけど結局は公平に皆さんにチャンス与えてくださいということで、地域が占領することはダメだということでした。そうしますとやっぱり学校を開放していただく以外ないのですよね。皆さんも場所が欲しいわけですから。もう少し柔軟な考え方で対応していただけたらいいかなというふうに思います。

渡辺　有難うございました。一応出席された各町会側のご意見を伺ったのですが、今のお話の中で学校協議会というお話が出てきていますし、はじめに水戸さんのほうから今までのわれわれの発言に対して何かご意見いただければと思うのですが。

水戸（生活文化部　子ども・男女共同参画課長）

今お話伺っていて、やはり子どもたちが触れ合うというチャンスがいろんな意味で減ってきているなと実感しています。何か一つが変わればということではなく、いろんな意味でからまりあっているなと思います。



水戸　課長

この部署にこの四月からまいりまして子ども事業についても関係がなかなか複雑でむずかしいといま考えております。学校のこともそういう意味ではそれぞれの事情をお互いに知っているようでまだコミュニケーションが不足している面もあるのかと思いますし、学校と地域、私たち区の職員との付き合い方を変えていくことも必要なのかと感じております。

渡辺　有難うございました。田中さん、今までのところで何か。

田中（生活文化部　参事）

私のところは市民活動推進課という名前なのですが、町会・自治会さんと、新しい市民活動ＮＰＯ、それから日赤の方などいろいろな方々と一緒にやっています。地域社会の中では地縁型の町会・自治会系と、新しいボランティア運動のグループを分けて考えられたり、対立したりというのが多いように思うのですよ。ちょっとずつ目的が違っています。私のところは一緒のところでやっているので分かりやすいのですが、そういうところを直していかなければいけないのじゃないかと思います。

田中　参事

それから世田谷の特色なのですが資源が足りない。今けやきネットのことをおっしゃったのですが、八十万区民の中でけやきネットの登録団体が二万団体なのです。単純に考えて一団体に十人いらっしゃれば二十万人になります。それで少ない集会施設を取り合っているのです。それでこれから何が起きるかというと、これまでの社会と違うのは団塊の世代の方々が地域に戻ってくる。単純にいうと今五十代ぐらいが十万人を超えるくらいいるのですね。その方々が昼間は働きにでていらっしゃる。今は女性の方も半分くらいは働いていらっしゃいますから。そうするとほぼ十万人がここ数年間で地域に戻ってくるようになり、今地域で昼間いらっしゃる方に、新しく人口が十万人ふえるような形になる。一体全体どういうことになるのだろうということが心配の種になってきております。

実はカラオケやダンスなどが盛んで、集会室が足りないということは、お年寄りの活動の場が足りないわけですが、お年寄り同士で場所を取り合うような形になってしまって、これから十万人が地域に戻ってきたときには非常につらくなってしまうのではないかと思っているのです。だからおっしゃるように学校を切り替えていかなければいけない。十年位前に比べて子どもの数は半分。お年寄りは二倍になっている。一方で子どものことについては何とかしなくてはいけないとなると、五十八万平方キロに八十万が住んでいる中での組み合わせになると非常に厳しい。下北沢中心にそうなるのですが若者の演劇が盛んなので集会所でも演劇をやりたい。それは地域の高齢者の方とぶつかるわけですよね。需要と供給があっていないものでごちゃごちゃになってしまう。ある集会について高校生、大学生が行ったり来たりしていると地域として怖いというのもあります。一方ある瞬間に地域をみると、何か災害が起きたときに働き手というのは中学生しかいないわけですよ。連携していかなくてはいけないわけですけど、それはわかっていても日々の活動については、資源が足りないからお年寄りと子どもさんで取り合いになったり、怖いとかなんとかうまくいっていないのがあるわけなので、考え直していかなければいけないと思います。先ほど神宮会長がおっしゃったように価値観が変わってきて困った問題と、もう一つは明らかに人口の構成が変わってきて、これまで直面したことがないような新しい社会になりつつあるので、これをこなしていかなければならない。

松原　今おっしゃった演劇や音楽は音がするものですから、普通のところでは断られる。大きい声をださないでくださいと。それは隣接の方にしてみれば、毎日毎日ガーガーやられては困る。またカラオケも困るということですが、老人クラブの方はカラオケが好きでいらっしゃるし、あれも楽しいことですが、音がするものは困るということになりますから、確かに場所については私どもの地域では大変困っております。

田中　これからのことを考えていきますと、健康増進ということ、これが大事だと思うのですね。

松原　それも場所がないのです。身近なまちづくりで毎年一定のサイクルの健康づくりのサークルができますね。するとそのままそのグループが残ってそこで活動を始められる。どんどんできてくるのは大変いいのですけれど、こんどは場所がなくなってしまって。ほんとうに早急に場所が欲しいのですね。

田中　健康は第一義的には自分で考えるべきことだと思うのですが、最後は支援が必要になるわけです。支援が必要になるまでどうやって暮らすかといったときに、たとえば長野県のある地域ではＰＰＫ、ピンピンコロリということを言っている。ずーっと元気でいて最後は…。言葉は悪いですが（笑）。それは個人にとってもいいわけですが、自治体にとっても特養ホームなどを考えれば、かなりのところまで元気でいていただくのがいい。健康を保持していただくのがある意味で自治体の役目でもあるとなると、健康体操、ダンスなどが大事になるわけですが、場所がいったいどこにあるのかということになるわけです。世田谷としてはそれ専用の新しい施設をつくることが難しいとなると、これまでの施設を有効利用するほかはない。

渡辺　今施設の話がでましたけれど、池之上の青少年会館が区の施設では唯一の防音設備のあるホールなの

ですね。私は三期ぐらいあそこの評議員をしていましたから、あの利用状況なら全部の部屋に防音設備をつければいいではないかと言ったことがあるのですけれどもね。他のところは全くそういうのはありませんから。

田中　世田谷としては学校の音楽室を地域に開放したり、児童館でなるべくバンドなどができるようにしたりしています。昔はエレキをもっているのは不良だといわれたのですが、今の警察の考え方では、いわゆる荒れている少年達に向けてエレキでももってバンドでもやらないかというように変わってきているわけなので、昔みたいにロックは悪いというのではなくなってきているので、それにつけてもそれなりの支援をやらざるを得ないです。確かにうるさいですけどね。

松原　うるさいです（笑）。結局青少年の居場所を考えていかなければいけない。

田中　実際たまっているところはあるのですよ。コンビニの前とか。夜までいるとかバイクがくると怖いから、まわりの方がなくしてくれというのが多いですよね。ことばで青少年の居場所づくりといいますが、地区でやろうとすると、実際には難しいところもあります。

学校との協調例

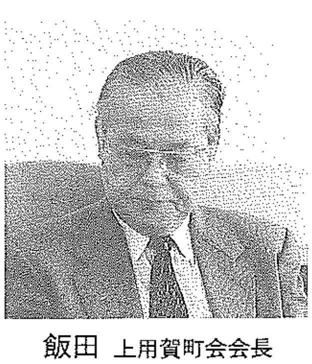
神宮　施設、特に学校関係で卑近な例をお話したいと思います。祖師谷は一丁目から六丁目までありますが、道路一本で烏山。京王線と小田急線の中間なのです。祖師谷駅からでも烏山駅からでも歩いて十七～八分くらいかかります。ですから施設の面からわりを喰うのですよ。辺境の地ですから。

前から地区センターをつくって欲しいといっていたのですが、最近粕谷区民センターができちゃった。祖師谷六丁目に用地を取得したところ、建ぺい率などいろいろの関係で今まで原っぱになっています。

学校の施設をもっと利用したらいいということでしたが、私は町会長になって十年になりますが、現在は島田校長、その前は橋本校長、田中校長と三代の校長にかかわりました。この方が立派な校長で地域を非常に大事にしてくださいまして、「どうぞお使いください。学校は学校のものじゃない。地域のものです。」という姿勢ですから違う。えらいと思います。

つい今年の四月、千歳台地区会館がオープンし会議室もできました。それまで会場がなくて塚戸区民集会所二階を使用しました。塚戸小学校の中に二部屋、二十九畳の稲穂の間というのがある。いまから十年前にできたのですが、これが地域で、PTAでも教職員でもいい。この稲穂の間で毎年地域では九月十五日に、落語や踊りをやったり、合唱をしたりまた子どもとの交流の場として活用している。それがとてもよかった。校長がそういう姿勢ですから、会議室も校長室もどうぞ使ってくださいという。ですから緊急の事件、爆発事故とか殺人事件とかいろいろあったのですが、集会所が取れないときは塚戸小で会議をしました。役員の中には子どもの頃通学した、今息子や孫が通学しているという人がいます。ですから自然に学校に足が向くのですね。同じ小野教育長のもとに六十四の小学校がありますが、校長の裁量でどうにでもなっていきます。学校もトップで決まります。

九月十五日には七十五歳以上の人たちに子どもが手紙を書いて届けてくれる。一時は教職員の反対があったそうですが、校長の一念で職員を動かし、子どもを動かしてもう四～五年続いています。ですから学校の施設も姿勢によって地域に開かれる。学校は地域のものだ、区民のものだというのが原則なのですが、そこまで切り替えてもらったらどうでしょうか。



飯田　上用賀町会会長

飯田　学校というのは開放はされているのですよ。ところがスケジュールの上での開放ですからね。月に二回校庭はスポーツサタデーで使う、あるいは社会福祉協議会のふれあい・いきいきサロンで部屋を使う。そういうので月に何回かは使える。ところが、町会活動というのは予定がない時に集まらなければならない。何かが起こったときに、皆で相談しようという時に、かつてはちょっと集まろう

というお宅はたくさんありましたよね。今はそれがなくなっていますから、学校側がひとつの故郷教室を作っておいて、予定外の時にそれが使えるというのがいいのではないか。行政がそういうことをやると、年間何回利用したのかという統計を取りたくなっちゃうんですけど、そういうことではないのです。(笑) 一年間そういう施設を作ったけれど使わないで済んだということは本来はいい地域社会ですよね。そういう意味での発想が必要なのではないか。校長先生によって学校の施設の使い方は変わりますが、校長先生も非常に理解はされています。ですから、個々のレベルではなくもう少し学校の施設の利用の仕方を皆で工夫していくことが必要なのではないかと思います。

神宮　地域に一番適正配置されているのが小学校であり中学校です。九十六箇所を効率的活用できれば…。ですからできるだけガードをはずしていくということが一番大事ではないかと思います。

飯田　そうですね。

渡辺　私が町会長やって十八年、青少年地区委員会の会長になって十六年になりますが、ずい分変わってきています。十五年くらい前は青少年地区委員会の会長会に集まっている会長さんの中には、小学校へなんか行ったことがない。お祭りの時にお神輿の中継地として使わして貰うことがあるので、一年に一度その挨拶に行くぐらいだと言われる時代がありましたが、今はそういうことは全くなくなっていると思うのです。というのは町会側が学校を取り込んでいると思います。うちの方の小学校ではランチルームとPTAが主として使う会議室はいつでも借りられます。それから今神宮さんのおっしゃった島田校長は九品仏小学校にいらしたのですよね。その時に学校と町会との関係は非常によくなりました。島田さんが塚戸には全然土地勘がないとおっしゃったので神宮さんをご紹介したので、神宮さんを尋ねられたと思うのですが、そういうことにちょっと気を使って学校の先生の行く先まで心配してあげれば、町会と学校との関係は今は十五年前と全く違っていると思います。そうすると学校で何か事件のあったときにすーっと入ってきます。私の十五年の地区委員の間に、ひとつだけいじめで転校した生徒がいたのですが、そのいじめられた親がいきなり代議士の秘書に報告しちゃったのですね。それが一番悪い例です。私たちの耳に入ってくれば適当な方法はいくらでもあるのですが。そういうことがないように町会がもっと信頼されるようにならなければいけないなと思っているのです。

松原　学校が防災の避難場所ということになって、どこの町会がここの教室と掲示てあったりしますと地域との接点が力強くなったような気がします。

玉井　学校は公共の建物ですから法律的な管理権は校長にあります。防災の地区避難所になっても、これとこれは学校が守らなければならないというのも指定されている。それが末端に浸透していないし、防災器具がどこに保管されているか地域の人は知らないのがほとんどです。地域がそれを知って理解することによって防災の意味も分かってくる。そういうことを町会・自治会のテーマとしてやっていきたい。砧・烏山地区社会福祉協議会というものを作っております。この前も老人福祉大会があったのですが、実際にやっている団体が二十四団体ありました。民謡・カラオケ・舞踊を披露してくれるのですが、練習場所がないと言ってくる。ではと天理教の施設を借りました。

玉井　給田西住宅自治会会長

地域のつながりをどう打立てるか

田中　以前は子どもさんがたくさんいて、PTAのつながりというか、子どもを通じて学校と親とのつながりがあったと思うのですが、今はお母さんも半分以上は働いていらっしゃるわけだから、学校を通じてのつながりができにくい。知り合う機会がない。どうやってそのつながりを作ればいいのか。団塊の世代が地域に戻ってきた時に、地域がどういうアプローチをするのか。団塊の世代より下のP

ＴＡつながりの「親父の会」というのは少し働いている。その方々が地域でがんばっていけばいいと思うのです。区民意識調査をやるとかなりのパーセントでボランティアはやってみたいという。ところがどうやっていいか分からない。こういう時に町会からどういうような取り組み方があるのか。

松原　学校協議会などで、どこという方法は別としましても、例えばゆとりの土曜日などに、今活躍していらっしゃる商社マンとか学校の先生にご出動願って、そこで、子どもや地域の人たちが集まって、囲碁を教える人がいれば囲碁をやればいいし、外ではサッカーをやってもいい。英語をならいたければそういう人に教えてもらう。数学の苦手な子は先生にちょっと教えていただくとか、そういう自由な考え方の場所を考えてみる。すなわち、土曜日はそこへ行けば何かしらある。そういうところでも出番はあると思うのです。

田中　今、松原さんがご出動願ってとおっしゃいましたが、ご出動願って出てくるかどうかというのは。（笑）

松原　でもボランティアをやりたいご意志がそれだけおありになるわけでしょ？

田中　ただ、いざやりませんか？というと腰が引けるというか、ちょっと出にくいような形があるのではないかと思うのですが。

松原　それなら地域の防災訓練とかお祭りとか、そういうことになるべく出ていただく。そういうことに出ることのある夫なり妻なりは協力態勢が自然に出てきますね。

玉井　青少年委員がうちの場合は非常に活躍しているので素晴らしい。事前調査をよくし、大々的イベントをやっています。昔は祭りは大人のものだったけれど、今は全然違う。地域が一体になるにはお祭りや運動会とかが一番いいと思い、子どもは国の宝だからそれを町会に取り込んで子ども本位のお祭りにしました。法被も新しく百ほど用意し花笠もつくって学校にお願いして子どもに参加してもらう。そうするようになると親が全部出てきますね。そして町会に対する認識が変わる。うちの場合は八〇何パーセント町会員です。青少年委員を若い積極性のある人を指名してもらって活躍してもらうのが非常にいい。学校もしょっちゅう行きますよ。それで学校の先生と付き合いをしています。

安田　私のほうは「子ども祭り」を毎年馬事公苑を借りてやっています。千人くらい集まります。警視庁の騎馬隊から馬を五頭くらい出してもらって乗せてもらったり、金魚すくいをやったりしていますが、もう三十年もやっているので、親になって自分の子どもを連れてきたりしている人もいます。馬事公苑は場所もいいし協力的です。

人材の発掘と育成

神宮　いつのまにか人材の発掘と育成に入ったようですが、玉井会長のところも相当頑張っているな、会長の力だなと思います。私の方も人材育成にいきあたっています。大体女性が多いのですが、今一生懸命やっている人も八十歳です。男性も二割三割いなければと苦労していますが、ある大手メーカーの社員で定年前の人、この人の奥さんは役員をやっていたのですが、この人に目をつけて引っ張り出して防災訓練などに出るようになった。そのうち奥さんに変わって自分が役員になり、自覚をもって学校のこと、地区のことを一生懸命やっています。人材というのは見つけて引っ張り出さなければならない。これが大変ですが、在職のうちから目をつけるということが大事ですね。私も二十四年民生委員をやった方に目をつけられて「ご主人ちょっと手助けしてください。」というのに乗せられて、十年も町会長をやるとは思わなかった。人材を見つけ掘りおこし、目をつけて育成してバトンタッチしていくのが町会長の使命だなと感じました。

渡辺　ちょっとお伺いしますが、教育委員会系統の青少年委員を推薦するのに内申協議会がありますね。あれは町会がやっていらっしゃるのですか。

玉井　あれは青少年地区委員を選出するのに、選出委員を決めるのですが、それをやるのは町会なのです。

渡辺　そうでしょう。うちのほうは青少年地区委員会にいた人で、この人は使えるという人をあげて推薦しているのですがね。

憂うべきこと

予備会議の時には、この

世相では日本はどうなるのか、これでいいのかということだったのですが、皆さんからいい話ばかり出ておりまして心配なことが一つもないようなのですが…

飯田　ぼくはありますね、町会活動ではないですけど、選挙の投票率が非常に下がってきているでしょ。そして形式的にはいろんな政策が決まってきますけど、世田谷区の選挙でも四割くらいじゃないですか。四割では本来なら民主主義は成り立たない。六割の人たちはそこに参加していない。委任したという取り方をしてしまうのは非常に危険だと思うのです。それから区のほうの資料で投票の男女比がでてますけれど、年齢比率というのはでてます？

神宮　でていますね、選管に資料があります。

飯田　先ほど団塊の世代の心配をされていましたが、この方々はある程度国の政策に関心をもっている。ところが地域、身近なところについては、言葉は悪いですが軽視している部分があると思うのですね。本来は国と、町―自分の住んでいる生活圏―国がありその中間東京都があり、世田谷区があるという発想を皆が持つともう少し地域社会に対する関心が深まる。そのために投票率が六割くらいに上がらないと民主主義そのものが非常に危険になってくる。戦後50何年と言いますが、実際には占領が終わってから50年たったところですね。そのあたりをもう一度皆で考えあうことが必要だと思います。団塊の世代の人たちは自分の所属している企業（団体）に対してほとんどの時間を過ごしてきたわけですから、そこを離れたときに、何を自分たちの生活の基準にしていくかという意味で、選挙そのものを重視していかなければならない。極端にいうと投票率の高いところは区全体で表彰してもいいですよ。（一同笑）

玉井　町会のそういう問題を全部含んで、組織としての立体的な考え方からすると、一つ一つの地方行政、また国の行政の変化というものはすぐひびいてくる。われわれの反応が遅いということは、それを一番考えてやるのは、家庭という密室です。密室でいろいろ考案されて、それがまとまってから行動を起こしていくので、そこにひとつの問題がある。ひとつの例としては都立の高校の学区制の廃止の問題がある。

　すでに小学校中学校のころにお母さんたちはどうしようか迷っている。自分たちの家庭としての非常に大きなテーマとなって渦巻いているが、われわれのほうはそれをキャッチできないし、援助もしてあげられない。何もとる方法はないのです。そうするとやはり地方の行政というものが確立していないといけない。世田谷区の場合は「安心・安全条例」また「子ども条例」をつくって地歩を固めているが、もうひとつ上の都がやるべき問題については、手がでないで混とんとしている。これに対してわれわれ町会としては、そういうような迷い、今からうちの子はどこの高校に行くのだ。世田谷区をはなれてどこに行くことになるのだと、今から町会の将来の姿についてどうなっていくのか、及ばずながら考えなければならない、これが私の心配の種と言えると思います。

町会長になった経緯

安田　今玉井さんが言われたように、心配はあるのです。世の中心配しなかったらおしまい。わたしはこう考えるのです。町会で協力が足りないと心配する必要はないと思うのです。われわれでも、まだ五十代のときに町会のことを考えたか。私なんかも役所にいたときや民間の会社にいたときも町会のことは分かりませんでした。定年後町会に引っ張られて今年で20数年になりますけどね。町会の交通部長をやっていた人が家にきて、町会を立て直してくれというのです。町会にはいってみたらこのままでは「ダメダ」というので町会の会則を改め婦人部を作り、女性を副会長にした。役員全部で回覧を配布し町会費も集めるようにした。26年の間に非常災害用の準備金として四百万の貯金ができた。それからうちは町会の役員の制服を全部支給しています。それをやってでも、結構金は残るものですよ。町会長というのはもっと自信をもってやれば皆協力してくれます。

神宮　会長の話で安心しましたよ。

町会長の身分

渡辺　今日、水戸さんにでていただいたのは、今日の議論の土台となると思った

からなのですが、さっきちょっと重要な話がでていたのですよ。というのは教育委員会系の青少年委員、それから生活文化部から出張所にいって、各町ごとに選ばれる青少年地区委員。さっきちょっと申し上げたように私は町会長として、青少年地区委員の会長の立場で委員会に参加した人の中から、これはという人を選んで青少年委員に推薦してきていますから、それなりの確信はもっているのですけれど、この二つの委員は身分が全然違うのです。それで青少年委員のほうは月いくらかの手当が出るという話もあるし（非常勤公務員手当）、ちゃんと教育委員会から任命されているわけです。青少年地区委員はそういうことは一切ないわけで、まして町会長にいたっては委嘱状がでたこともなければ、何もないわけで、そこを教育委員会系の人たちが、間違えて定年制をしくべきだとよく言われるのですが、私はとんでもない間違いだと思います。多少でも手当が出たりして、定年制が規則として決まっているのなら、これはいいと思うのです。町会長については法律的に何も守られていない立場なのに、「あんたはやめるべきだ」という青少年委員がぼつぼつ増えてきているので私は非常に心配しているのです。私がいいたいのは青少年委員結構です。それから学校協議会結構です。だけど学校というのは校長先生が三年なり四年なりで代わる。それから生徒も中学なら三年、小学校なら六年でどんどん代わる。中身は一定ではないのですね。だからそれはそれで立場を守って子どもたちを脇から見る学校協議会というものがあって結構です。その学校協議会というものに対して町会も協力してくれと言われれば喜んで協力していますけれども、これはその地に住んでいるかぎり変わることのない町民と、そこから選ばれた町会の立場とは全然違うのです。そこをはっきりして貰わないと、変な動き、流行が出てきているので心配しているのです。

青少年地区委員と青少年委員

私は四十年前からできている青少年地区委員会と、七年前にできた学校協議会とは別の目的、方向があると信じています。各出張所単位で学校とＰＴＡと地域とが共同して、そのところに住んでいる子どもたちの面倒を見ようということなのであって、これは定点観測だと思うのです。学校協議会とか青少年委員のように何年かでかかわるのではなく、学校があるとそこの近所に住宅や商店街があり、毎日学生を見ていて、この頃の生徒は服装が乱れている、途中で自転車をひっくり返してもそのまま行ってしまうとか、今ではないですが数年前まではいわゆるシンナーを吸っていて吸殻が落ちているとか、そういうのを町の人は見ているわけです。そういう定点観測をしていてそれを学校ＰＴＡと一緒になって考えようというのが青少年地区委員会なのです。生い立ちも違えばやっていることも違って当然だろうと思うのです。なお言えば青少年地区委員会では週休二日制に対してずっと反対してきたのですけれども、鳩山邦夫文部大臣のときに子どもを家庭に帰すのだから認めてくれと議会で盛んに言われたのをテープにとっております。子どもを帰すということが約束になっているのに、近頃学校協議会を中心として二日制になったのだからもっとイベントをやらなければいけないと、そういうことばかり言う。これは本末転倒です。学校協議会は人が代わっていくのだから、それはそれなりにやって結構です。そうかといって町会がそれを全然やらないのではなく、私のほうの地区委員会で言えば年に四つ柱を立ててしっかりやっております。その他に二日制になったからもっとイベントをやれというのならば、どうぞ教育委員会なりＰＴＡでやってください。われわれは違うのだということを言いたいのですけれども、八十をすぎた町会長などいらない、もっと早く定年を決めるべきだという人がたくさんいる。われわれとしては全然別の立場でできて今まで育ってきたのに余計なことを言うと思っているのです。そうじゃないぞと強調して言っているのですが、その辺のご意見を伺いたいと思います。

水戸　世田谷区は23区ではじめて今年の四月に子ども条例ができまして、今編集委員長に言っていただきましたように、とにかく地域のいろいろな人たちがいろんな立場で子どもたちを一

緒に育てていく。その原点は当然家庭であるというところと、それぞれの立場でいろんな支援を子どもたちにしていこうというのが今回の世田谷区の条例の一番の基本でございます。青少年委員と地区青少年委員会というのは名前が似ているがゆえに混乱がでている面もございますが、区としてはそれぞれの立場で子どもにとってやるべきことはまだまだありますので、コミュニケーションをとりながら役割分担をして充実していきたいというのが私たちの立場でございます。

最近私が考えていますのは子どもを核とした交流をもっと広げていただきたいというのがお願いでありますし、ずっと長く続いている行事についても子ども自身にもっと参加度を高めて貰いたい。なぜかというと小学生はいらっしゃいというと皆くるのですが、中学生高校生が次の大人との間で抜けてしまう。子どもなのだけど中学生、高校生とどう付き合ってゆくかということが、これからの具体的課題で、是非いろいろな機会を活用してご配慮していただきたい。今年子どもの社会参加はこれからどうすればいいかというテーマで公募をして子どもたち二十五人が話し合いをしました。そうしましたら集まった子どもたちからは家族以外の大人ともっとしゃべりたいという意見もありました。

松原　下北沢では体験学習というのをやっていますね。とってもいいみたいですよ。

水戸　皆が皆じゃないと思いますが、もっと付き合いたいと思っている子どもが結構いるのだということを体験しました。是非中高生の参加の仕方をそれぞれの地域の事情に合わせて実現して欲しいというのがお願いです。

渡辺　水戸さんには地元に近いものですから、青少年地区委員会の行事を見ていただいていますからお分かりかと思いますけれども、九品仏の青少年地区委員会は異年齢の交流ということが唯一絶対の柱ですから、小学生の行事には中学生が立ち会う、中学生に対しては高校生から指示をする、その上にボランティア会というのがあって、そこが予算の関係など全部やっていまして、大人は一切声をかけていません。川遊びなどかなり危険を伴うので大人は脇から慎重に見ていますけれど。それは地区がやることで、学校協議会のほうは学校を中心にして流動的に学校の中をまとめていただければいいのだと思っております。それが発足のときからすっきりしなかったので一言申し上げました。

清水　お話ししたくて待っておりましたけれど、皆さん活発なご意見がありました。田中さんも水戸さんも太子堂地区のいろいろな行事、地区委員会、ふれあい祭りなどを是非おいでになって見てください。中学生、小学生が中心になって活動するところまでこぎつけて参りました。黙っていると太子堂地区何もやっていないのかと思われますので（笑）。太子堂地区は七つの町会がありますが一生懸命やっております。あれやこれや必ず町会長が関係しますので、こんな忙しい町会長はないと思っていますが、立派にやっておりますので是非ご覧においでいただきます。お待ちしております。最後に太子堂の出張所の事務局の方も協力して大変大きな働きをしていて下さることを付け加えておきます。

渡辺　最後に、こういう時代町会はどうするかということなのですが、町会には警察・消防・学校・区の出張所・それから社会福祉協議会とあらゆるところからじかに連絡がきます。こちらから見ていますと横の連絡の全くない、縦割り社会なのです。こういう時代、町会の役目というと、無名の無資格の町会長が全部を受けてやっているわけですから、それをどう調整していくかということではないのかなと思っております。今回の座談会のテーマの「これでいいのか日本」ということについては大分議論が離れましたが、昔からたとえ話があって、犬が人に噛み付いても新聞記事にはならないが、人が犬に噛み付けば記事になるといいます。子どもを目の高さから落として殺すとか、一週間も食事を与えないというのは、全くあってはならないことであって、そういうのはそれだけを徹底的に議論すればいいので、新聞やテレビがわあわあ書き立てることではないのだと思いますよ。もっと正しく生きている人たちのことを宣伝すべきだと私は思います。

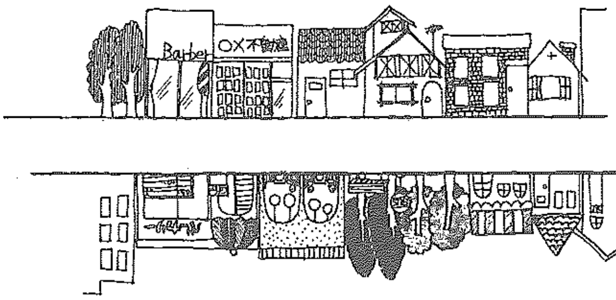
町会長の責任

先々週新聞の投稿にでて

いたうたですが「あなたがた　古き世代がかくなせり世直しするまで死ぬなと言われぬ」仙台の村上なつこさんの投稿ですけれども。まあ、町会長などというのもババ抜きのババみたいなものでゲームオーバーまで代わることができないのです。定年制をしいて世の中が成り立つなら勝手にしてくれと私は思っておりますが、そうならないように町の中で後継者を養っているとさっきおっしゃったけれど、その必要性を一番感じているのは、実は町会長自身なのです。そういうことをきちっとしてやるべきであると思っております。町会としてまともに背負うべきテーマは青少年地区委員会だと思うのですが、その辺われわれの苦しいところをご推察いただき協力をお願いしたいと思っております。田中さんには今全く縦割りだといいましたが、これは悪口ではなくて現実だと思うのです。それをとにかく基盤として受けなくてはならないのが町会なのですから、その点をよくご理解いただきたいと思っております。

田中　これからも幅広くご支援させていただきます。

渡辺　まだ言い足りないことがたくさんあると思いますが以上で今日は終わらせていただきます。有難うございました。



座談会を終わって

近頃の世相を嘆いて「これでいいのか日本」という座談会を計画したつもりでしたが、予備会議と本番の間では大分勢いが違い、各単位町会でそれぞれに苦労されて地域の学校との関係も随分改善され、地区での話し合いの場所としてかなり自由に使わせていただいているとか、女性の会員を増やすとか、商店街の音楽祭を町に引き込むとか、いろいろな工夫をしてコミュニケーションの場を広げることにより町会として上手に乗り切る方法を考えてきており、新聞を賑わすような破局的な状態から距離を置いていることが分かりました。

一方、町会などが利用する場所の問題が終始問題になりましたが、一般的に言えることは、ＩＴを利用した先端的なシステムと自認されているけやきネットが、実は行政の末端と住民との間に神経の通わないシステムを作ってしまっているのではないかという疑問を抱きました。一例を挙げれば一部の趣味のグループなどが、仲間の数を頼んでいろいろな施設に片端から同時に申し込んで、どれか当たればいいというような方法をとっていることは、我々はいろいろな場面で実情を知っているけれども、システムとしては捉えられていないことが察知されました。つまりＩＴが人間関係を分断していて、血の通った判断ができなくなっていたことに、もっと早く気づくべきではなかったでしょうか。

団塊の世代の定年退職者をいかに地区の役員に取り込むかということが話題になりました。私は日頃ボランティアにはクローズドショップのボランティアと、オープンショップのボランティアがいると思っているのです。オープンショップのボランティアとは、体育や趣味を中心として集まった中で自然に世話役的な働きをする人ですが、その専門の範囲で隣町へ、地域大会へと手を広げることには労を厭わないグループです。一方、町として何かしなければいけないというときに、専門を離れて町のために義務感を持って尽くしてくれるのがクローズドショップのボランティアで、これは日頃から心懸けて防犯パトロール、防災訓練、歳末警戒、リサイクル事業などに参加してくれるボランティアの中から選ぶほかはないと思っています。その点松原さんの意見は正鵠を射たものだと思います。

それやこれやで座談会の題名を変更しましたことをお許しください。

（渡辺）

詐欺商法にご注意

玉川地域

わが町会で発生した詐欺商法

奥沢中和会長　板谷英宣

最近、高齢者を対象にした詐欺商法のトラブルが多発していますが、十月、町内に発生した事例を挙げ、他地域に及ぶ犯罪防止の意を思い情報提供いたします。

近年、四十歳後半の二人組みが、カーキ色の上下の作業衣を着用し、「区役所から頼まれてきました。等々力通りの工事をするのに震動がしても大丈夫かどうか床下を点検します。」と家にいた奥さんに説明し、これを信用して家に入れましたが、一人の男は床下に入り、一時間ほどしてから床下のパイプが五本も故障していたから修理しておきました。多分水道管ではないか。」と言い、工事代金、三十四万円を請求し、それを支払ったが、領収書と関係書類は後日郵送いたしますと言って帰りました。しかし領収書の郵送はなく、不審に思い玉川警察署に届けましたが、証拠になる資料、手がかりがなく、犯人捜査が付き詰まっております。この犯人は、他地域でも同様の行為を重ねているものと思います。

点検商法のトラブルは多方面にわたっています。例えば、「キャンペーン中で近所を回っています。特別価格でサービスいたします。」と言うふれ込みでリフォーム・耐震検査・商品販売訪問等、不安感を煽ったり、威迫したり断っても去らない。特に孤独の高齢者が狙われる傾向が多いようです。このような手口に対しては、間を置き誰かに相談する余裕を持ちたいものです。二人暮らしの老夫婦の葬儀の後、取り残された者に優しく声を掛け、話し相手になり、これからの人生を大事に生きるようにと、原価三万に及ばない布団を八十万円で売りつけ、次々に商品を売りつけられて、支払い不能に追いこまれる老人も多く発生していると聞きます。

契約書面を受け取った日から八日以内（マルチ商法は二十日以内）であればクーリング・オフ（解約）ができることを知っている人が少なく周知されておりません。かたり商法・催眠商法・危険です商法・マルチ商法・霊感商法・注文していない商品を送り付ける送り付け商法・商品先物取引商法等など、悪質商法対策については、警察との連携により、悪質商法対策を町ぐるみで対策を講じなければならない世相になって来ています。

北沢地域

代沢地区における犯罪発生状況

代沢地区町会連合会長　宗　晴

(1)ひったくり。女性、ことに老人のハンドバックを狙う。自転車を使用。バイクの二人乗り、又は二人組が後を付けて来るなど、犯人は下北沢で遊んでいる若者が多い。私も三回狙われました。

(2)ピッキング。アパート、マンションで多発。

(3)宅配便を装った侵入盗。留守を確かめ、庭へまわってガラスを破り侵入し、現金のみ持ち去る。

(4)郵便局の「ゆうパック」を持って、郵便局員を装った男が「息子さんからのお届け物です。着払いですか

らお金を頂きます」…中身は紙くずその他。

(5)植木屋三人組。「一時間二千円で植木の手入れをします」と言って一人が働く。終って支払いをしようと玄関に出ると、三人の男がいて「切枝を運んだり、車に積んだり、三人で働いたから三人分よこせ」と請求し脅す。怖いので三人分支払ってしまう。

(6)消火器の詰め替えをした後、支払いを済ませると「お水を一杯ください」と言うので、台所へ行った間に、置いてあった財布を持って消え失せる

(7)白蟻対策。白蟻を調べてあげると言って持参した白蟻を撒き、白蟻退治の薬を散布して料金をとる。

(8)ねずみ対策。「ねずみが縁の下に入らぬように」ともちかけて、金物の枠を強引に取り付ける。

(9)耐震診断。「区役所の調査に来ました」と言って耐震強化を強調し、パンフレットを置いてゆく。

(10)台所の掃除。「一時間でキッチンをピカピカにします。今、お宅のすぐ近くに来ています。」と女性三人、後に侵入盗を手引きしているのではないか。

以上、住宅が殆どで住民が少なく、昼間は老人、留守の家が多い代沢地区は犯罪をやりやすい、狙われやすい地区なのだと思います。私は被害が起きる度、会合のある度に住民に注意を促しております。

高齢者の消費者被害を防ぐために

消費生活課長　阿竹　恵

日頃から消費者行政にご理解・ご協力を賜わりましてありがとうございます。

さて、経済状態が遅々として好転しない中、私たちを取り巻く環境は大きく変化しております。消費生活センターに寄せられる相談件数も、昨年度より三割も増加しました。とりわけ、高齢者の相談件数は、昨年の同じ時期に比べ、四割も増加しています。これは、一人暮らしや高齢者の夫婦だけで暮らす世帯が増えており、悪質な訪問販売や点検商法などのトラブルに巻き込まれやすい状況にあることが一つの要因であると考えられます。

相談の内容としては、次のようなものが目立っています。

《事例一》ねずみや耐震等の点検を口実に訪問して、床下や屋根などの工事やリフォームを強引に勧誘し、次々に高額な契約を迫る。

《事例二》同居の高齢の父が電話で水道給水管の清掃サービスを承諾した。父は水道局の人だと思っているが違うようだ。

皆さま心当たりございませんか？日常生活の中で、このような事例は多々経験されているのではないでしょうか。私は絶対大丈夫と思っていても、ちょっとした心のスキから被害にあってしまう場合もあります。

このような被害を防止するには、高齢者が生活する身近な場所で、様々な取り組みを行なっていくことが必要です。まず、日頃からご家庭や地域社会の中で、コミュニケーションを図り、孤独な高齢者をなくしていくことがとても大切です。

また、消費生活センターも積極的にその役割を果たしていくことが求められております。現在、消費生活センターにおきましては、特徴的な相談事例や身近で発生している手口など、「消費生活センターだより」で紹介など行っておりますが、多くの皆さまに読んでいただけるよう、一層工夫してまいりたいと考えています。

さらに、町会や自治会など団体を対象に、消費者被害や食の問題など出前講座も行なっていますので、是非ご利用いただきたいと思います。併せて、契約トラブルから衣食住など、消費生活に関する相談もお受けしています。お気軽にご相談ください。

皆さまと私ども行政が力を合わせ、高齢者の消費者被害を未然に防ぎ、暮らしやすい地域社会をつくって行きたいものです。

相談専用電話　３４１０－６５２２

啓発専用電話　３４１０－６５２３

松沢リサイクルフェア

松沢ごみ減量・リサイクル推進委員会　会長
桜上水一丁目町会　会長
堀池　有

　昨年「ごみ減量・リサイクル推進委員会」が発足し、その活動の一つとして「リサイクルフェア」が決まった。検討の時間も少なく、手探りの状況の中ではあったが、出張所の建物を借りて、文字通り手作りのフェアを開催することができた。予想以上の入場者もあって、各方面で話題になり、反響もあったようだった。

　それだけに今年のフェアについて、いろいろな角度から検討を加えた。近くの学校、商店街、企業、各種団体に参加を呼びかけ、展示内容の企画書を提出してもらい検討した。一般的にこのようなフェアは堅苦しい感があるので、柔らかさ、気軽さを折り込むことを考えることにした。

(1) 若いお母さんや子どもさんが、多数来てもらえるようなことを考える。

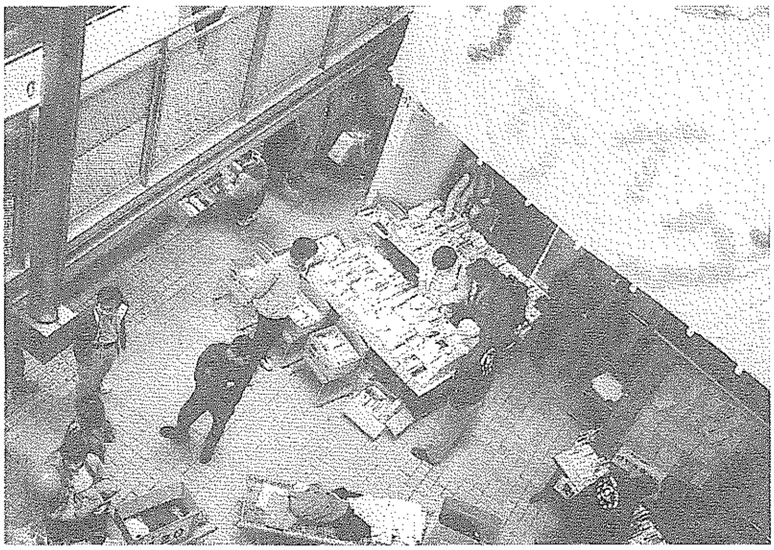
(2) フェアの中にゲームや遊び感覚を取り入れて、入場者が楽しんでもらえるものを考える。

　以上のことを踏まえて、ユニークなコーナーを新設したり、展示の内容を変更した。

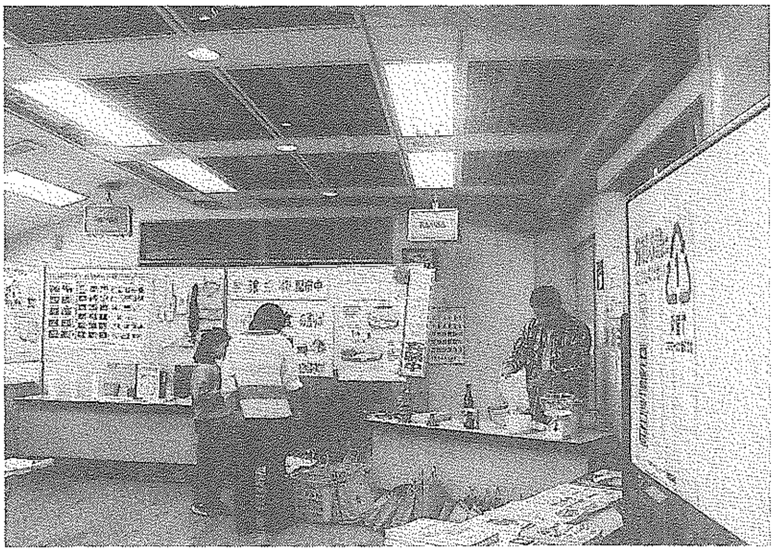
　一例をあげてみると、こどもの服のリサイクルでは、短い時間で閉店するほどの人気、子どもたちの作品展示コーナーでは熱心に批評を交えながら見学している親子、こんにちはの挨拶から始まるゲームやごみを分別するゲームでは、子どもたちが主導して、大人が教えられている場面がしばしば見受けられた。

　また、中学校茶道部によるお抹茶席での一服で癒しているお年寄り、囲碁・将棋コーナーでは大人に挑戦している子ども、ボランティアによるたこ焼き広場で舌つづみを打つ母子、寄席文字の実演コーナーで、名人芸に見入る大人たちの姿が微笑ましく感じられた。

　フェア当日は晴天に恵まれ、地域商店街まつりや大学学園祭が実施されていたこともあって、入場者は約一、二〇〇名と一日限りのフェアにしては、まずまず成功であったと自負して

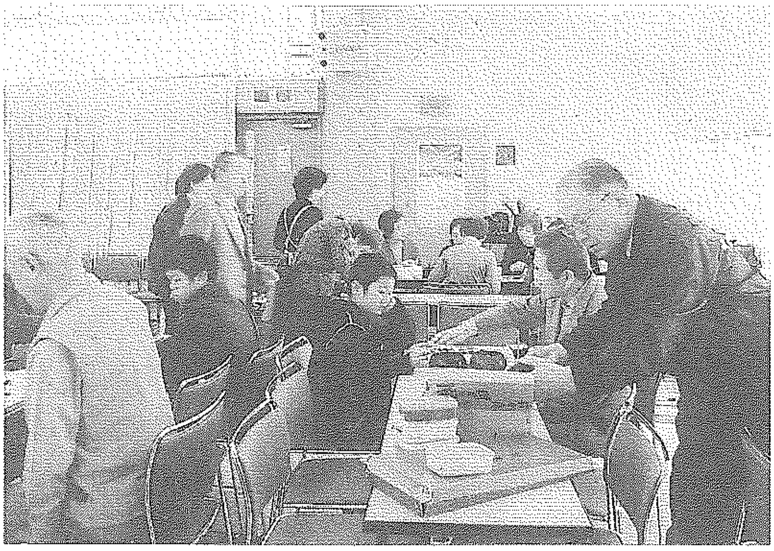


こども服リサイクル交換会会場



ごみの分別クイズ

いる。
　要はその内のどれだけの方が、ごみの減量やリサイクルについての関心をより高め、実行するかにある。
　当推進委員会のメンバーは、区内で初めて実施した古着リサイクルについて十年近くの実績があり、情熱と実行力のある方ばかりである。今後も出張所の協力のもと、委員一同で目的に向かって頑張っていく所存である。
　望むならば、区内各所でこのようなリサイクルフェアを開催して欲しい。そして一人でも多くの区民がごみの減量・リサイクルについて、関心と実行力がより高まれば、素晴らしい世田谷区となるであろう。


こどもと高齢者の対抗囲碁・将棋

随想

砧地域　悩み

成城団地自治会　副会長兼幹事長　奥山　武

　私たちの住宅は築四十数年、同時に自治会も発足しました。東京都住宅局の指導で入居の際、自治会に加盟することが義務づけられています。
　入居の時三十歳前後の方は、今七十歳前後になっており、今では高齢者向きの住宅に進んでいく傾向になっています。全戸数は三〇〇世帯でありますが、九月十五日の「敬老の日」に七十歳以上の方に記念品を配布するため、調査したところ一八〇名の方がおられました。年々増加する傾向にあります。
　このように高齢化傾向のため、毎年役員改選となると役員候補者の選出が難しく、特定の人が何年もやらざるを得ないのが現状です。
　若い元気のある方に望みをかけている訳ですが、サラリーマンが多いため、対外的な会合には出席することが不可能な状況で、役員を引き受けることが出来ないということです。
　自治会の活動としては、毎月第一日曜日には、団地内の清掃をはじめ、夏には納涼盆踊り大会の開催、九月の敬老事業、十二月には餅つき大会、暮れには集会所に本部を設置して防火、防犯活動を開催しています。また、年一回は、団地内の広場において自治会主催の防災訓練を開催していますが、参加人数を確保するため苦労しています。
　数年前まで十月に開催していました運動会も、少子、高齢化のため参加者の減少により開催することが不可能になりました。
　年々、このように高齢化の波が押し寄せてくる社会を考えると、自治会活動の在り方を考えるべき時期に到来するのも時間の問題でしょう。
　他の町会、自治会も同じ悩みをかかえていると思います。何か名案があればご指導をよろしくお願いいたします。

世田谷区町会総連合会に「日赤社資功労表彰」

平成14年10月30日に明治神宮会館で開催された、日赤東京都支部創立115周年記念大会において、世田谷区内の各町会・自治会の長年にわたる日赤社費（会費）募集活動の功績に対して、感謝状が贈られました。

感謝状

世田谷区町会総連合会様

多年にわたり赤十字活動資金の募集を通して国の内外における社業の進展に尽され多大な貢献をされました

日本赤十字社東京都支部創立百十五周年にあたりそのご協力に心から感謝の意を表します

平成十四年十月三十日

日本赤十字社東京都支部
支部長　石原慎太郎

〔世田谷区赤十字奉仕団　小池いせ子委員長の話〕

この度の社資功労表彰受賞まことにおめでとうございます。

町会・自治会の皆様には、日頃から日赤活動に全面的にご支援とご協力をいただきまして、本当にありがとうございます。皆様よくご存知の通り、日赤の活動に要する経費は国民の方々からの寄付によってまかなわれています。世田谷区の社費（会費）募集額は、皆様のおかげをもちまして、東京都内で常に第１位を占めて参りました。今後とも、社費募集活動をはじめ日赤の各事業に対しまして、引き続きご支援とご協力をお願い申し上げます。

エコライフ実践活動で 大臣表彰

十六号で代沢中町会の地球温暖化防止活動ついて代沢地区町会連合会長の宗さんから発表していただきましたが、この度「代沢地区エコライフ実践活動推進委員会」として環境大臣より対策活動実践部門表彰を受けました。

表彰式は平成十四年十二月七日（日）に環境に関する京都議定書が審議された国際会議場の近くの京都府総合見本市会館（パルスプラザ）稲森ホールで行われ、学校や企業を代表する五つの実践部門のうち、唯一の町会としての受賞でした。

当日は宗会長が阪東代沢出張所長とともに会場まで出張し鈴木大臣より直接表彰状を受けました。

十六号にも紹介されたとおり、町会としては日本で唯一ヵ所選ばれて、三十七日間CO_2削減に取り組み、四十二項目の「エコライフ行動リスト」を実践した結果、

大臣から表彰状をうける宗会長

表彰状

対策活動実践部門
代沢地区エコライフ実践活動推進委員会
代表者 宗 晴 殿

貴委員会は地域におけるエコライフ行動の実践普及に積極的に取り組まれ地球温暖化防止対策の推進における功績は誠に顕著なものがありますよって地球温暖化防止月間にあたりこれを表彰します

平成十四年十二月七日
環境大臣 鈴木俊

CO_2排出量平均削減量一・九%、特に熱心に取り組んだ四割の世帯では平均五%削減となり、光熱費は前年同期より五%削減という輝かしい成果を挙げることができました。

代沢地区では、この実験に参加した後も更に地域を広げ行動リストの第一段階「すぐやってみよう」を皆で引き続き実践する運動を展開中です。

世田谷区では更に区内各地区から町会ごとに候補者を募って実践運動を広げることを計画中です。

宗会長は受賞後「大変名誉なことと思います。エコライフ活動は実践すれば簡単な行動です。世田谷から東京都、そして日本全国の皆さんに展開していただければ幸に思います」とコメントしておられますが、宗さんのねばり強さと、不断の実行力がなければ誰でもできることではないという思いも切実です。

環境大臣と記念撮影する宗会長

第一回 ふれあい・いきいきサロン 全国サミット

主催	(福) 世田谷区社会福祉協議会
共催	世田谷区
	(福) 東京都社会福祉協議会
後援	世田谷区町会総連合会
	(福) 全国社会福祉協議会
協賛	(財) 日本社会福祉弘済会
協力	国士舘大学

十二月十四、十五の両日、世田谷区民会館集会室、世田谷区役所ブライトホール、大会議室、国士舘大学ホールを会場として掲題の会議が開かれました。町会総連合会は日常社会福祉協議会をバックアップしている立場で、この会議を全面的に後援いたしました。

今なぜ「ふれあい・いきいきサロン」なのか。各町会が募金に協力している社会福祉協議会の「共同募金」「歳末助け合い募金」の配分の重点が変わってきていることはご存知でしょう。今までは区内の各福祉施設に配分されていたものが、急激な高齢化で施設の充実では間に合わない。そこで「地域福祉の切り札はこれだ」と登場してきたのが「ミニデイ」や「ふれあい・いきいきサロン」です。社協の補助金も昨年あたりからこれら地域住民の自発的な助け合いの組織に重点的に配分されるようになった訳です。

日本医科大学教授竹内孝仁博士によれば「老人の痴呆を促進する諸悪の根源は孤独にある」ということになり、このぼけが増えたらどんなに施設を作っても足りない、介護保険料をいくら値上げしても足りないということになります。そこで地域の住民どうしで高齢者が孤独に悩まないように、ひっぱり出すことが重要な使命になってきました。

そこで社協の「ふれあい・いきいきサロン」助成が重要な項目になってきた訳です。世田谷区社会福祉協議会はこの方向に積極的に賛同し、サロンの結成についての反応が一番早かったためサミットの第一回開催地の栄誉を受けました。

当日は全国から二百名弱、区内から約百五十名が参集し事例発表や、シンポジウムが行われ、最後に次ページに掲載した大会宣言が採択され、五年後には世界サミットが開かれるようになればと期待をふくらませながら盛会のうちに終了しました。

「第１回ふれあい・いきいきサロン全国サミット」大会宣言

「ふれあい・いきいきサロン」は、地域住民自身が互いに支援するという地域福祉本来の活動を、小地域で行う草の根の福祉活動である。

いまや地域には、少子高齢社会にともなうさまざまな問題が山積し、地域住民の力による福祉と福祉のまちづくりが強く求められている。

「第１回ふれあい・いきいきサロン全国サミット」に集った我々は、「ふれあい・いきいきサロン」が、地域福祉を拓く活動としてなくてはならない活動であることを確認した。

これからの地域福祉を推進し、「地域社会でつくりだす福祉」を具現化するこの活動を、さらに発展させていかなければならない。

我々は、今後の取り組みとして次のことを確認して、第１回全国サミットの意義を留めることとする。

一.「ふれあい・いきいきサロン」の成果を地域社会に伝え、普及啓発と利用をうながすこと。

一.「ふれあい・いきいきサロン」を全国に数多くつくるため、積極的に地域に働きかけ、情報の提供や支援を行うこと。

一.「ふれあい・いきいきサロン」を継続的で住民にとって魅力的なものとするために、活動内容の開発を行うとともに、地域に開かれたサロンとすること。

一.「ふれあい・いきいきサロン」の活動を充実発展させるため、サロンどうし、地域の社会資源､他の活動とのネットワークづくりを行うこと。

一.「ふれあい・いきいきサロン」を地域福祉の有力な担い手とするため、介護保険を始め、各種の地域福祉制度と手を結ぶこと。

２００２年１２月１５日

町総連ニュース

▼七月十八日

正副会長会、常任理事会、理事会、総会

一　平成十三年度事業報告
二　平成十三年度決算報告
三　平成十三年度会計監査報告
四　平成十四年度事業方針（案）
五　平成十四年度予算（案）
六　役員（会計）の補充（案）
七　総会決議（案）

以上が提案され原案どおり承認された。

次いで永年勤続者百五十名の表彰が区長をはじめ来賓多数臨席のもとに行なわれ、安田会長より各地域の代表に感謝状が手渡された。

▼八月三日、四日

第二十五回ふるさと区民まつり

町総連として今年はじめて区民まつりに参加（出店）し、町会・自治会加入促進ポスターの掲示や加入チラシの配布等広くPR活動を行った。

参加各町会関係者との情報交換の場となったばかりでなく区役所各関係職員、警察、消防など官庁関係との交歓に資することができた。

▼八月二十二日
正副会長会
一　平成十五年度世田谷区予算等に関する要望の件
二　オウム真理教（現アレフ）に対する観察処分更新の件
三　平成十五年度総会の日程の件
四　役員懇談会開催の件

▼九月三日
公安調査庁へ要望書等提出
　安田会長は、町総連を代表して公安調査庁と公安審査委員会を訪れ、オウム真理教に対する観察処分の延長を求める要望書と署名簿を提出した。

▼九月五日
常任理事会
　行政と役員との懇談会
（四川賓館）

▼九月二十六日
町総連だより編集会議
一　第十七号の編集方針の件

▼九月三十日
東京都町会連合会常任理事会
一　全国自治体連合会開催の件
二　宿泊研修の件
三　東京都町会連合会の法人化の件
四　その他

▼十月二十一日
常任理事会
一　平成十五年度世田谷区予算等に関する要望の件

▼十月二十二日
町総連だより編集会議
　田中茂生活文化部参事、水戸都紀子子ども・男女共同参画課長との座談会（一頁参照）

▼十二月十日
町総連だより編集会議
一　第十七号の編集について

> お悔やみ申し上げます
> 弦巻町会会長
> 佐佐木　一雄　殿
> 平成十四年十一月二日没

編集後記

　座談会の内容が予定と違ってしまったことについて十二ページの後書きにも記したように大いに責任を感じています。下手をすると以前から続けてきた町会長の苦労話と変わらないという説も多くありました。題名の世相を糺すは、正すであるべきだとの意見も半数近くあったのですが正すでは糺すの半分の力もないと、ルビを振ることで妥協することになりました。

　もともと「町総連だより」は一般区民に配布することを目的とするものではなく、地区にあって指導的立場にある町会長や役員を対象とするものですから標準漢字にとらわれる必要はないのではないか、円周率を三にしたからといって学習効果が上がる訳ではないという現実に目覚めて毅然とした態度をとろうということになりましたことをご理解ください。

　結局町会長の皆さんが、その場その場で各方面と折衝を重ねながら青少年との接触を図っているなかで危機的な局面の発生を抑えてきているのが世田谷区の実情で、今後とも町会員の皆さんに一層の理解を得て、きめ細かな協力を仰いでいかなければならないという至極平凡な結論になりました。この座談会記事によって町会役員の皆様に「地味な協力を重ねてゆくより仕方がない」と納得していただけたら幸いです。

　詐欺商法の蔓延に応じて急遽消費生活課長からのコメントもいただいて特集記事を組みました。筆者の町会事務所にも「今水質検査をしたいといって来ているが」という問い合わせがあり、「施工した建設会社と現在相談中だからといって断るように」と返事をした結果、事なきを得た事例もあります。

　成城団地自治会からの問いかけに関しては他にもいろいろ問題をはらんでいると認識しております。種々の例をお寄せいただけると幸いです。

　日赤社資功労賞、エコライフ実践活動表彰、ふれあい・いきいきサロン全国サミットの開催と世田谷区の、またその実践母体である町会の活動が全国的に注目されていることが明らかになった事例が続きました。大変名誉であるとともに、更なる取り組みに関しては相当な覚悟が必要なのではないかと緊張せざるを得ません。

　平成十五年は区長選も予定され町総連の活動にも何かと変革が予想されます。一層の相互理解によって区政との協力関係を築いてゆく必要を痛感します。

（渡辺）